

CHROME HEARTS

sample
streich

sample streich

クロムハーツ

店から三駅離れた街にある、繁華街。

泰晴は仕事帰りの和志と駅で待ち合わせをして、二人きりで遅めの夕食をとった。

「ふー、結構うまかったね、あの店。ずっと気になってたんだ。」

「……そうっすね。」

洋食屋を出てそのまま駅に向かおうとした和志の腕を、泰晴は掴んだ。

「ねえ。どこいくの？篠宮くん。」

「え、どこって……もう、帰らないと。」

少し不安げに和志は答える。

「何のためにわざわざ俺が、こっちまで出てきたと思ってるのさ。」

わざと冷たく意地悪い言い方で、泰晴は和志を威圧した。

「メシなんかどこでだって食えるよ、うちの店でだってさ……、近所にもたくさんメシ

屋あるじゃない。」

「……でも」

戸惑う和志の腕を掴んだまま泰晴は微笑し、淡々と言う。

「わかってるくせに。」

その言葉を聞き、和志の頬が紅潮する。

駄目押しでもう一度、言い聞かせるように泰晴は言った。

「……わかってて、ここでわざわざ待ち合わせしたくせに。」

「……」

何も言い返すことが出来ず、その場で和志は項垂れる。

「さっさと済ませないと、電車無くなっちゃうよ。俺、歩くのやだからさあ。」

ね、と笑顔を見せ、泰晴は和志の腰に揺れるウォレットチェーンを軽く引っ張った。

「早く行こ。」

泰晴が和志に買い与えたシルバーのウォレットチェーンは、例えるなら、飼い主と犬を繋ぐ鎖。

和志が小さく頷いたのを見ると、泰晴は駅とは真逆の裏道へ足を向けた。

「篠宮くん、別に広い部屋じゃなくてもいいよねえ？」

泰晴はそう言いながら、薄汚れたパネルの室内写真を指でなぞる。

「……あんたらカップルか。」

フロント係のくたびれたじいさんが、二人の頭の天辺から爪先までを舐めるように見て言った。

その吐き捨てるような言い方が、まるで侮蔑されているように聞こえ、和志は居た堪れなくなり、俯く。

「ん、まあね。それじゃ二〇一号室、二時間休憩で。」

泰晴は気にする様子も無くさりと答えると、千円札を二枚フロントに差し出した。じいさんは札を数えてレジに仕舞うと、部屋の鍵とコンドーム一個を寄越す。

「部屋あんまり汚すなよ。」

「慣れてるから平気。行こ、篠宮くん。」

フロント横の階段を二階に上がると、角部屋の前で止まった。

「入って。」

「……」

泰晴に促され、和志は部屋に入る。

狭い部屋に敷かれた毒々しい色のカーペットと、派手な柄のカーテンを見、和志は眉をしかめた。

掃除や換気も適当なのか、嫌な匂いも窺っ

ている。

ただセックスすることだけが目的の空間。

高校生の時分はこの猥雑な雰囲気に憧れたこともあったが、色々経験してきた今入ってみると、憂鬱さが増すだけだった。

特に和志は、潔癖症の気が最近強くなってきた。備え付けのスリッパを履くのにも抵抗があった。

泰晴は何も感じないのか、スニーカーを脱ぐと、そのまま靴下でカーペットの上を歩き回った。

「篠宮くんってさあ、こういうちよつと安くてアレなとこって、来たことある？あるよね？」

「……いや、無いっす。」

「へえ、無いんだ。でも俺も随分久しぶりに来たなあ……大学んとき以来かな？」

「……」

「あんまり金無かったしねえ……、それでもそんな何回も来てた訳じゃないけどね。あ、でもお風呂けっこう広い……」

泰晴は和志とは逆に随分喜んでるようであり、子供のようにはしゃぎ、あちこち扉を開けたり、ベッドに寝転がって古いカラオケの本を捲ったりする。

「すっげ、レーザーディスクのカラオケだよコレ！っていうかさ、壁薄いから歌えないよねえ。」

「……」

「……篠宮くん？」

「は、はい。」

「どうしたの？立ったまんまでさ。」

「……あの、今日は何したらいいんですか。」

「ん？セックスしに来たんだよ。」

泰晴の口からその単語を聞き、和志の下腹

部がじんわりと熱くなり、疼く。

「……」

「でもさ、実は俺、カメラ忘れてきたんだよね。」

「……え。」

泰晴に恥ずかしい写真を撮られ、目線とモザイク入りとはいえ、それを全世界に定期的に公開される日々。

もう数ヶ月になるだろうか。

いつもいつも撮影が前提のセックスばかりで、和志は頭がおかしくなりそうだった。ギリギリのところとどまっているのが、自分にも解る。泰晴もそれを見抜くのが得意なようで、いつも大声を出す寸前の和志に優しくする。

不安定なやり取りだったが、それが和志の、ごく当たり前の日常になってしまっている。

「それじゃあ、今日は、しませんか？」

おそろおそろ、和志は泰晴に訊ねた。

「いや、するよ。店じゃ思い切り声も出せないだろうしさ、してくよ。」

和志は安堵のため息をつき、初めてかもしれない撮影無しのセックスの予感に、少しだけ戸惑う。

戸惑いを隠すように、和志は泰晴に背を向け、言った。

「それじゃあ、シャワー浴びます。」

「うん。綺麗にしてね。」

スウェットとジーンズを脱ぎ、下着を脱ぐと、和志は浴室の扉を開けた。

ずっと使われていなかったのか、タイルが少しほこりでざらつく。

そして随分寒かった。

お湯が出るのかさえ不安な状態で、蛇口を捻る。

十秒ほどで、温かいお湯が勢良く出てきた。

「ふう……」

昼の仕事でかいた汗をざつと流し、ボディソープを泡立てて下腹部を丁寧にに手のひらで洗う。恥毛辺りを洗っている最中、トイレに行きたくなり、和志はシャワーを止めた。

浴室を出ようと扉を開けると、服を着たまの泰晴と顔を合わせる。

「あれっ。俺も今、入ろうと思ってたのに。」
まだ泡が残っている和志の身体をまじまじと見つめ、泰晴は不思議そうに言った。

「あっ、あのっ！すいません、トイレ……」

「なに？おしっこ？」

「……」

「いいよ、そこですればいいじゃない。」
黙る和志に向かって、泰晴はとんでもないことを言い出した。

顎を決つて、「ほら、そこで。」と浴室を指す。

「！そんな……」

「いいじゃない。見せてよ。見たいなあ、俺。篠宮くんがおしっこするところ。」

浴室の出入り口を塞ぐように立ち、笑顔を
見せ、泰晴は甘えるように言う。

「……」

しているところを見せるまでは、浴室から出してくれそうにも無い。

いつもそうだった。いくら拒んでも、怒るわけでもなく、良いと言うまで何度何度も。
しっこく。

……どうせ今日はカメラも無い。

和志は大きなため息をつく、排水口に向
かって立ち、シャワーの蛇口を捻った。

するとすぐにシャワーが止められ、和志は
振り返る。

「？」

洋服のまま裸足で浴室に入ってきた泰晴が、シャワーの蛇口を掴んでいた。そしてまた、とんでもない言葉が泰晴の口から飛び出す。

「そういうのじゃなくてさあ……どうせなら、四つんばいでおしっこしてみて？」

一瞬で、和志の頭部に血が上った。

流石にそこまで強要されることは予想の範疇外で、和志は思わず声を荒げる。

「いやだ、嫌です……！」

後退り、背が冷たいタイルの壁にぶつかる。泰晴はゆっくりと和志に顔を近づけ、不思議そうに言った。

「何で？別にいいじゃない。篠宮くんは犬で、俺は飼い主なんだよ。そういうプレイ。」
「悪びれる様子も無く、さも当然といった顔をして泰晴はヘラヘラと笑う。」

泰晴という男は、こういう人間なのだ。

カメラが無いだけマシだ。

「……」

観念して、和志は四つん這いになる。

「お尻、こっちに向けてよ。」

言われるまま、四つん這い状態で、和志は尻を泰晴のほうへ向けた。

「篠宮くんはオス犬なんだから、片足も上げないと。ね。」

脂汗が額に滲んだ。

けれど、もう何を言われても、逆らえない。和志は唇をきつく噛んで、浴槽に左足をかけた。

その様子を泰晴は背後から見下ろし、さも愉快げに、無邪気に笑う。

「あはははは、すごい格好。やっぱカメラ持ってくれば良かったなあ……」

ピッ カシヤッ

聞きなれた、電子的なシャッター音。

「えっ？」

驚いた和志が振り返ると、携帯電話を構えた泰晴が、しゃがみ込んで微笑んでいる。

「なーんてね。写メール使えるんだもんね、そういえば。」

「そっ、そんなんっ！」

和志は浴槽から足を下ろし、慌てて泰晴の携帯に手を伸ばすが、簡単にかわされて、濡れた床へ突っ伏した。

「濡らさないでよ、機種変更したばっかなんだからさ。」

「けどっ、そんなんっ……」

画像が残らないからと思い、聞いた我儘だった。

「大丈夫。これは、俺だけが楽しむ写真なんだから。」

携帯電話を操作しながら泰晴は言ったが、和志は首を何度も横に振る。

「そう言って……いつも、サイトにのせるじゃないですかっ……」

「……わかってるじゃない。ちゃんと。」

「うっ……」

恥かしさと憤りで、和志の目に涙が滲んだ。蹲ったまま肩を震わせ、必死に泣くのを堪える。

流石にやりすぎたかと思い、泰晴は濡れた床に膝を付き、和志の両肩を抱いた。

「大丈夫だよ。篠宮くんには俺がついてるんだから。」

優しく言い、泣き顔を覗き込むが、和志はふいっと横を向く。

「……」

「篠宮くん……」

そっぽを向かれた顔をもう一度覗き込み、名前を呼んだ。

「……」

「和志。」

下の名前で呼びかけると、和志はようやく泰晴の顔を見る。

「大丈夫だよ、ね……？」

泰晴は和志に優しく声をかけながら、髪を撫でて頬や鼻先にキスをする。和志は引き寄せられるまま泰晴の肩口に顔を埋めた。

「俺は意地悪してるわけじゃないんだよ……ただね、和志のことを自慢したいだけなんだ。俺の『かずくん』をね。」

「……はい。」

ペットにそうするように、泰晴は和志の髪の毛を撫でながら言う。

「俺のお願い聞いてくれるよね……？」

酩酊したように潤んだ目で泰晴を見上げ、

和志は小さく頷いた。

「おしっこするときは、犬の格好で。ね。」

「は……い。」

携帯電話を構える泰晴に言われるまま、さつきしていたように和志は四つん這いになり、片足を浴槽にかける。

見られて、撮影までされる恥ずかしさで、両腕にうまく力が入らずにがくがくと震える。「ちゃんと身体支えないと、自分のおしっこ被っちゃうよ？」

からかうように泰晴は言い、携帯電話をかまえる。

「かずくんは、俺の犬なんだから。」

限界だった。

「あ……ああ……」

犬の格好で、和志はタイルに放尿した。

シャワーで浴室の床を流したあと、泰晴は放心状態の和志に携帯電話を見せ付けた。

「ほら、ムービーで撮ってみたんだだけさ。」

和志はゆっくり画面から顔を背けるが、記録されていた音声が浴室内に反響する。

『ちゃんと身体支えないと、自分のおしっこ被っちゃうよ？』

『かずくんは、俺の犬なんだから。』

勢いのいい放尿音にかぶるように、泰晴の笑い声が響く。

『あはははは！随分我慢させちゃって、ごめんね？』

「あつはつはつは、すつごい。ちゃんと音

入ってる。けっこうコレも使えるもんだねえ」

何度も繰り返し、泰晴は動画を再生して、笑った。

和志は蹲ったまま、両耳を手のひらで塞いで首を横に振る。

「いやだ……、動画なんて聞いてない……」

「うん？大丈夫だよ、音声は消すからさ。」

後ろからだから顔だつて写って無いし、ね。」左右に首を振り続ける和志の傍らに泰晴はしやがみ込み、優しく声をかける。

「いやだ……いやだ……」

目をきつく閉じ、怯えたように和志はうわ言のように繰り返している。

「篠宮くん。」

泰晴は携帯電話をたたみ、和志の濡れた身体を正面から抱きしめた。

回した腕に力を込め、耳元で囁く。

「身体、冷えちゃったね。」

「てんちよ……服、濡れる……」

「平気だよ。それより、意地悪してごめんね……？」

「……」

不安に支配される和志をなだめ、立ち上がらせると、泰晴は和志に問いかけた。

「ここですか？」

訊ねられ、和志はまだセックスしていないことを思い出す。

しかしフロントに払ったのは、休憩二時間の料金。

「でも、時間は……」

「まだ三十分も経ってないよ？」

「……」

和志にとっては、気の遠くなるような、長い時間を感じられていたが、それはたった三十分ほどの出来事だった。

「一時間半あったら、一通り色々出来るじ

やない。俺もう、けつこう辛い。」

そう言いながら、泰晴はジーンズのアスナリを下ろす。

「ね。」

和志はだまって頷くと、片膝を付いて、泰晴の勃起したペニスを頬張った。

※この本は、オフィシャル設定のものではありません。

錆びない心。

20050306 Streich / アキヒコ

<http://streich.spawn.jp/05/> streich@streich.spawn.jp

DL 販売版 2011 年 6 月

ファイルの複製、転載、配布、交換、オークション販売等をしないで下さい。
(DL 販売サイトで会員登録をすると、PC 故障など万が一の際にも再 DL が出来るそうです)
万が一、DL 販売サイト以外の場所で見つけた方は、ご一報いただけると幸いです。
宜しくお願いします。

※ 18 歳未満の方の閲覧を禁じます。

ch

Stretch